



[上] 新川の決壊で、瞬間に一面泥海と化した西枇杷島町
[左] 約 100 m にわたって決壊した新川左岸堤防



11日から降り続いた大雨で越流した新川洗堰

堤防決壊

日本海をゆっくりと南下していた秋雨前線は、台風14号の影響で活動が活発となり、東海地方から四国地方にかけて大雨をもたらした。特に名古屋市では11日一日で428mmの降水量を記録。これは過去最も多かった240.1mmの倍近い雨量で、年間降水量の3分の1以上が降ったことになる。また、12日午後5時までの24時間降水量では534.5mm、1時間の最大降水量は93mmと、いずれも明治24年からの観測史上最大の値を記録した。この猛烈な雨によって新川が破堤したのは9月12日の未明のことだった。新川は前日からの雨で計画高水位を超える危険状態が数時間続いていたが、午前3時30分頃になって名古屋市西区あし原町の支流と交わる地点の左側堤防が長さ100mにわたって決壊。内水氾濫の影響もあって、西区のほか西枇杷島町、新川町などで約1万8000戸の浸水被害を出した。ほぼ同時刻の午前4時頃、今度は新川と並行して流れる庄内川が中川区の一色大橋下流右岸で溢水。床上4戸を含む約190戸が浸水被害を受けた。一方、大雨のピーク時にあたる前日の夜には天白川が越水しており、さらに愛知県南知多町と名古屋市緑区では竜巻も発生した。結局、この豪雨によって東海3県で合わせて18万世帯に避難勧告が出され、被害は死者10人、浸水家屋7万戸以上に及ぶなど、昭和34年の伊勢湾台風以来の惨禍となった。



決壊個所では懸命の復旧工事が行われた



水没した町を呆然と見つめる住民



冠水した道路ではゴムボートが行き交った